「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像

㉛

小泉とし夫

■五族協和の国

昭夫は満洲をどんなふうにイメージしていたのだろうか。深夜の朝鮮海峡を航行する博釜連絡船景福丸のベッドで、画報に載っていた地平線までつづく大平原のグラビアを回想していました。地平線に赤々と沈む大きな太陽が印象的だった。そして広漠とした沃野（よくや）に、内地から集団移民した開拓農家のコウリャンや大豆を耕作している風景が脳裏に焼きついていました。

昭夫には、満洲とは日本・朝鮮・満洲・支那（中国）・蒙古（モンゴル）の人たちによる多民族国家で「五族協和・王道楽土」と解説する戦時中の教科書どおりの認識しかありませんでした。

だから、満洲事変の真相も、関東軍による満洲国支配も、また日本人による民族差別の実態すら知らなかったし、これから勤務する満洲国の行政機構についての予備知識もなく、ただ多民族国家だから日本の役所とはだいぶ違うだろう、という漠然とした想像が浮かぶだけでした。

そのころの満洲国の地方官庁（十九省公署）には約二千七百余人の官吏が勤務しており、そのうち日本人は千七百七十人（六五％）、非日本人（朝鮮・満洲・漢人）が九百五十人（三五％）となっていた。

これは昭和十六年（一九四一年）の資料（『満洲国官吏録』ですが、昭夫が着任する昭和二十年（一九四五年）でも、この比率はほぼ同じであったと思われます。また中央官庁の構成も、やはり日本人対非日本人の比率は同様で、満洲国の行政機構を日本が支配する色彩が濃厚でした。

それは関東軍司令官が日系官吏の任用ばかりでなく、法律制定にも関与したことでも知られる。最高決定機関でさえ事前に関東軍の「内面指導」を経なければ、どんな案件の審議もできないほどだったという。昭夫がそうした事情を知るのは、それから約一カ月後のことになります。（毎週木曜日掲載）

鴉の星

鴉が鳴いていた
ああ　ああ　ああ
その昔睡蓮もゆれていた星で
七月の織女星のように
黒いバラの伝説を秘めていた星で

雪が降り続いていた
ああ　ああ　ああ
星は地球のようにまるくて固くて
けれどとうに止むことを忘れてしまった雪が
限りなく降り続いていた

伝説は胡弓の調べのように
銀河のすみずみまでしみ渡るだろう
終いまで残っていた魚の思い出に
鴉がひとり無心に鳴いているのだという
ああ　ああ　ああ
止むことを忘れた雪が
限りなく降り続いているのだという
ああ　ああ　ああ

（詩集「動物哀歌」より）

「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像

㉜

小泉とし夫

■釜山から新京へ

昭夫たちが乗船した景福丸が、米潜にも浮遊機雷にも遭遇することなく無事に玄海灘を抜け釜山港に着いたのは午前七時ごろで、埠頭（ふとう）に並ぶ港湾施設が眩（まぶ）しいくらい朝日を浴びていました。

船内で軽い朝食をとった昭夫たちは、下船して釜山桟橋駅に向かい、午前八時発新京行急行〈のぞみ〉に乗車したと思われる。新京駅には翌日の午後二時近くに到着する便でした。

しかし、実際には乗車した列車について不明な点が多く、同行した山内君は釜山から新京へは二泊三日かかったような気がすると回想していた。新京へはもう一本の急行がある。十九時四十五分発のハルビン行〈ひかり〉だが、新京駅には深夜（二十三時五分）に到着するものだから、たぶんこの便ではなかったと思われます。

〈のぞみ〉が京城に着いたのは十六時四五分、平壌へ着いたのは二十一時四十三分で、駅頭はとっぷり暮れていました。もの珍しさで退屈しなかった車窓風景もすっかり遮断され、列車が満洲国の国境駅安東を通過したのは深夜の午前二時半を過ぎていました。

鉄路は、鮮鉄（朝鮮鉄道）から満鉄（南満洲鉄道）に切り変わったのです。昭夫たちは不自由な座席だったが、長旅の疲れで奉天（現瀋陽）駅に停車するまでぐっすり眠っていた。乗降客のざわめきで目が覚め時計板を見ると、もう午前九時を指していました。

奉天はさすが満鉄本部のあるところで、レンガ造りの駅舎も構内もずば抜けて整備されていた。窓を上げると、金属的な満人たちの会話が聞こえてきて、とうとう満洲に来てしまったと、言い知れぬ感慨がわきあがってきました。

終着駅の新京には、それから約五時間後の午後一時五十分に到着したのです。

（毎週木曜日掲載）

鳥の未来

夕暮れを飛ぶ鳥の姿のなかに
実験されている未来がある
深山に鳴く鳥の声のなかに
分析されている未来がある
一瞬のうちにおこなわれる空間の
鳥の生殖のなかに
試験を受けている未来がある
今静かに鳥の未来は
青黒い宇宙に向って
音もなく始まっているのだ

（詩集「動物哀歌」より）

「動物哀歌」の詩人
村上昭夫の肖像 ㉝

小泉とし夫

■新京で現地教育

新京（現長春）特別市は満洲国の首都で、皇帝の居所・帝宮があり、国政の中枢である国務院・中央行政機関や特殊会社、公社などが集中し、また軍政の中心である関東軍指令部の本拠もここにありました。

新京駅の前から、市の中央を南につらぬく大同大街があり、その大街が建国広場につきあたるほとりに、南嶺と呼ぶ法学・医学・工学の各大学や大同学院などの広大な文教地区があった。この大同学院の付属合同学校で、昭夫ら新任官吏たちが約一カ月にわたる現場教育を受けました。

講義内容は不明ですが、満洲国の歴史や政治経済の現状、非日本人の民俗・習慣、戦時下の行政に関する諸問題など、満洲国官吏としての知識を啓発する詰め込み教育だったとみられ、とくに民心の動揺を抑えるように注意を喚起したことと思われます。

大使館の人事官が、空襲もなく食料の心配もない満洲だと昭夫たちにセールスしたが、十六年八月より米穀・砂糖・マッチなど生活物資十五種に統制がひかれ、九月には統制品すべてが切符制になりました。

B29は十九年七月に按山・大連へ初空襲をしたのちにも、奉天・本渓湖の工業施設へ空爆をしているのです。

一方、軍需産業の労働力不足も深刻になっていました。そこで十七年から日本内地と同様に、国民勤労奉仕法（十月）、学徒勤労奉仕令（十二月）を次々に発令していきました。

満人たちは、何度も戦乱をくぐってきたので、こうした変化には敏感で、戦局の不利をいちはやく嗅ぎとり、中央銀行券が紙くずになるのを恐れ、都市部の満人たちには預金を下ろし、土地や物に代える動きがみられるようになっていました。

（毎週木曜日掲載）

牛の目

牛の目のなかに
牛のふるさとがある
牛のふるさとはかわかぬなみだとなって
何処までも続く牛だけの道だ

日ましに疲労してくる草原のなかを
少しのためらいもなく牛は消えてゆく
そのあとには
とぎれたような風だけが
時々ふっと残るのだ

（詩集「動物哀歌」より）

「動物哀歌」の詩人
村上昭夫の肖像

㉞

小泉とし夫

■ハルビンの公署へ

新京における新入官吏の現地講習は、四月初めに始まり四月末に終わりました。そして受講者たちの赴任する役所が発表されたのです。

赴任先は、各自が申請した第一から第三希望地の中から、講習主催者が決定したもので、必ずしも第一希望地に決まったわけではなかった。

古舘君の場合、配属された北満の北安省公署は、第三希望だったし、同じ任地に決まった山内君も第二希望が任地となっているのです。浜田君は第一希望どおり南満の熱河省公署に配属されました。彼がこの地を希望した理由は、身内のだれかが戦死した戦跡の地だったからという。

昭夫の配属先が浜江省公署に決まったのは、たぶん第一希望通りだったと山内君は推察している。昭夫がハルビンにあこがれていたフシがあったというのです。確かにハルビンは、浜江省公署が所在する都市でした。

しかし、昭夫の勤務する職場については、だれも知らなかった。ちなみに古舘君は総務課で、山内君は開拓庁産業課、そして浜田君は人事課だった。

三月半ばに盛岡駅を出発してから、ずっと一緒だった級友たちとも別れ、昭夫はハルビンの待つ浜江省公署へ新たな旅立ちをしたのは五月初めでした。

新京からハルビンまでは、京浜線でおよそ六時間の旅程だった。沿線の風景をうっすら緑に染めていたのは、ニレ・アカシヤ・ライラックの木立ちで、町も村落も季節の彩りで晴れやかな表情を浮かべていました。

遠くかすんだ空に、尖塔（せんとう）や葱（ねぎ）坊主をしたロシヤ教会の屋根が車窓に飛び込んでくると、昭夫は何となく襟を正したい郷愁にかられたのです。とうとう、ハルビンに来てしまったという思いで胸が熱くなっていたのでした。

（毎週木曜日掲載）

深海魚

深海魚を見たと思う
生きていると言えばわずかに言える

陽にさらされた深海魚は
あれは魚ではない
日の谷間のかげろう
もっと暗いいのちの影
影がいきなり光線にさらされると
屍になる

それなのに
ほんとうにあれは魚だったのか
陽にさらされた深海魚は

（詩集「動物哀歌」より）

「動物哀歌」の詩人
村上昭夫の肖像 ㉟

小泉とし夫

■宿舎は閑静な住宅地

ハルビン（哈爾浜）駅からつま先上がりにまっすぐ目抜き通りが延びていて、その先に中央寺院（聖ニコライ会堂）とよぶロシヤ教会が見えました。その十字架尖塔をもつタマネギ型のドームから昭夫は言い知れぬ感銘をうけました。

そして駅頭からバロック風の建物と森の緑に包まれた市街と、遠く煙突の煙にかすみ天涯までつづく球形の景観を眺めながら、ふと「わたしを呼んだのはこの空間だったのか」と霊感めいたものが閃（ひらめ）きました。

駅前一帯の高台は政治の中心として設計された新市街で、各国領事館、諸官庁、ハルビン鉄路総局、デパートやホテル、病院が集中していた。新市街は中央寺院のあるロータリーを基点として碁盤の目のように区画されていて、これから昭夫が赴任する浜江省公署もこの一角にあります。

駅前のタテの車站街（駅前通り）を中央寺院に向かって行くと、ヨコの長官公署街と交差し、左右には満鉄直営のヤマトホテルと日本領事館が並んでいる。ロココ調のヤマトホテルの側を左折すると、ホテルの隣にがっしりした四階建ての建物があり、そこが昭夫の目指す浜江省公署でした。

昭夫は人事課に新京の訓練所で渡された辞令を差し出しました。昭夫がどんな職場に配属されたのか、北安省に赴任した二人の級友は、その課名すら覚えていなかった。側聞するところによると、課長はエリートの日本人だったが、直属の上司は朝鮮系の人で、内地から渡ってきた新米の昭夫をたいへん温かく迎えてくれたという。

その上司は職務ばかりでなく、市内の地理や地域住民の生活風習などについても徐々に教えてくれました。こうして満洲における昭夫の役人生活はスタートしたのです。宿舎はハルビン市馬家溝区の巴陵街にある浜江寮でした。

（毎週木曜日掲載）

象

象が落日のようにたおれたという
その便りをくれた人もいなくなった
落日とありふれた陽が沈むことの
天と地ほどのへだたりのような
深い思いをのこして

それから私は何処でもひとり
ひとりのうすれ日の森林をのぼり
ひとりのひもじい荒野をさまよい
ひとりの夕闇の砂浜を歩き
ひとりの血の汗の夜をねむり
ひとりで恐ろしい死の世界へ入ってゆくよりほかは
ない

前足から永遠に向うようにたおれたという
巨大な落日の象をもとめて

（詩集「動物哀歌」より）

「動物哀歌」の詩人
村上昭夫の肖像 ㊱

小泉とし夫

■ハルビンの街角

寮は緑地と木立ちの多い住宅地区にあって、市内の北東にありました。この住宅街と新市街の境に川幅の狭い馬家溝河が流れていて、昭夫はこの川に架かる橋を渡って役所に通うのです。

どこか中津川上流あたりに似た風情があると思いながら橋を渡ると、川岸の楊柳から白い柳絮がふわふわと飛んで来て昭夫の心をくすぐりました。この橋から大直街を南下して間もなく中央広場に行きあたり、駅前通りに右折すると役所まであと十分ぐらいで着きます。

ハルビンという地名はロシア語のハオビン（大墳墓の意味）からきていると言われる。帝政ロシアが十九世紀末（明治三〇年代）に清朝（中国）から不毛の草原だった北満洲を買収して東洋のモスクワをめざし着工したものだった。

それまで松花江沿岸の一寒村にすぎなかった草原は、東清鉄道（北鉄）の建設とともに市街地として発展し、まさにロシア人のハルビン（大墳墓地）となったのです。

満洲事変を経て昭和七年に日本の植民地の満洲国となっても、至るところにロシア的な香りが漂う街でした。昭和十二年にハルビンを訪れた室生犀星が「古き露西亜の空気もかかりしか／古き露西亜の時計の針折れ／とある店に乏しくひさがれたり／古き露西亜の思ひもかかりしか／銅のメタルにザアの顔ゑがかれ／とある店にひさがれたり／古きペテルブルグをみむために／われは伸びあがり／遠き露西亜の空気を愛せんとす」（「哈爾浜詩集」）とうたったように街角に残る古いロシアの情趣が、犀星の詩心をそそったのです。

役所の上司は実に思いやりのある人で、休日にはハルビン市内をガイドしながら、ロシア・レストランや中華料理店で珍しい食事をおごってくれたりしました。おかげで昭夫は、市内のほとんどの地理を一カ月でマスターしました。

（毎週木曜日掲載）

熊のなかの星

熊のなかで別れてゆく星がある
熊のなかで別れてゆく星は
人のために別れるのだ

熊のなかで失われてゆく星がある
熊のなかで失われてゆく星が
人のために失われるのだ

熊は飢えたり殺したり
皮をはぎとられたりきもをとられたり
それから恐怖したりしかできないのだが

熊のなかで飢えたりするその星が
人のために飢えるのだ

（詩集「動物哀歌」より）

「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像

㊲

小泉とし夫

■ロシア文字の店

ハルビンの人口は、犀星が訪れた昭和十二年には五十万人だったが、昭夫が赴任した二十年には七十万人に膨張していました。満人すなわち中国人が五十五万人、日本人七万人、ロシア人五万人、その他世界四十数カ国の人たちが居住するという大国際都市でした。

市内は機能的に区分され特別区、埠頭区、八站区、新市街、馬家溝、旧ハルビン、頭道街、傅家甸（フーチャーテン）の八区の行政区があり、新市街は官庁、馬家溝は住宅、埠頭・八站・傅家甸は商業の街で、傅家甸は満人中心の街でした。特に埠頭区はハルビンの下町で、斜紋街（経緯街）の交差点を南端とし北は松花江岸に至るメーンストリートは、きめ細かな石畳のキタイスカヤ（中央大街）とよび、北欧式ロシア建築のレンガ造りの商店が並ぶ街でした。

毛皮商、宝石商、食料品店、雑貨店、ロシア菓子店「マノス」「ビクトリヤ」など、ロシア文字の看板が軒をつらね、有名なアールヌーヴォー式建築の「モルデン・ホテル」「チューリン（秋林）・デパート」もあって異国情緒を醸し出していました。チュウリンの白系ロシア人の売り子は、すき透る白い肌と金髪、青いひとみをしていてドキドキするほど魅惑的でした。

このハルビン銀座は日・満・露のほか三十数カ国の居留民が、とりどりの服装で行き交い、国際色豊かなにぎわいをみせていたが、夜八時すぎともなれば、各店が一斉に閉店するので人通りがぱったり途絶え、闇に浮かぶのはカフェやキャバレーの明かりだけでした。

支那そばしか知らなかった昭夫も、だいぶハルビンの食事に慣れて、水餃子や肉饅はよく食べたし、あやしげな臓物の入ったスープもすすりました。ロシア人の食堂でボルシチや黒パンにピックルスの味も覚えました。（毎週木曜日掲載）

屠殺場にある道

人の子ひとり通らない
けれども通って行った者がある
それがなになのか分りはしない
ひとつの点のようにも遠く
ひとつの塵のようにも軽く
けれどもたしかに振返りながら
歩いて行ったものがある

例えば見詰めてくれていた誰かの眼が
あんなに冷めたくはない
真白な雲になってはいないかと
冴えてくる虹のようなその道を
のぼって行った者がある

あるいは落してくれた誰かの涙が
もしかして
水晶の玉になってはいないかと
とぼとぼと独りのその道を
捜して行ったものがある

人の子ひとり通らない
けれどもたしかにその道を
通って行った者がある

（詩集「動物哀歌」より）

「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像 ㊳

小泉とし夫

■神話の崩壊

公署に赴任してから一カ月余り過ぎて、仕事に対する興味もわき充実した役所生活でした。昭夫は鮮系、満（漢）系の職員と分け隔てなく交際していました。ところがある日のこと、呼ばれて課長の部屋に行きました。すると課長は、昭夫の耳を疑うような注意をしたのです。

「君は上司とほずいぶん親しいそうだが、あまり深入りしないほうがよい」

怪訝（けげん）そうな昭夫に、さらに課長はこう言い放ちました。

「彼は朝鮮系だ。われわれ日本人は、落ち度があっても鮮系の者におじぎをしてはならない。たとえ上司であってもだ。君は一日も早く彼を追い越すことを考えなさい」

唖（あ）然とした昭夫は、課長の顔を穴をあくほど見詰めました。「これが五族協和の実態なのか。こんな人種差別があってよいものか」と、怒りが胸いっぱいに広がりました。

こうした民族差別意識は日系官僚にとっては常識で、日系の小学生も満人（中国人）は使用人でしかないという認識をもっていた。終戦のとき大連第一中学二年だった山田洋次氏（映画監督）は「五族の中で日本人が一番優れている」という民族差別教育を受けていたことを証言しているのです。「五族協和」を信じてきた昭夫にとってショッキングな神話の崩壊でした。

だが昭夫は課長の注意を無視して、鮮系の上司との交友は今まで以上に親密度を深めていきました。家庭に招かれて家族と一緒に朝鮮料理をいただきながら、岩手の民謡などを披露しました。昭夫は小学生のころから唱歌が得意の科目で、随分よいテノールののどをしていたのです。

昭夫は上司とばかりでなく、他の非日系の職員や雇員とも隔てなく接したので信頼できる日本人として評価され、敗戦後の混乱期には昭夫の危機の救済にもつながったのです。

（毎週木曜日掲載）

宇宙を隠す野良犬

野良犬はなぜ生まれてきたのか
それが分る時
宇宙の秘密が解けてくる

それはなぜ好かれないのか
その肌はなぜ悪臭に汚れていて
なぜみなに追われるのか

それはなぜ痩せているのか
消えそうにも痩せていながら
なぜなおも撲殺されようと
つけねらわれているのか
それはなぜ尻尾をたれるのか
人の姿を見さえすると
なぜおびえた痛ましい目を向けて
逃げ去ってゆくのか

そして野良犬は
これからも生まれるのだろうか
生まれて誰にも好かれはしないのに
何時も固い棒で追われるばかりで
かど立った石で打たれるばかりで
何時も暗くて際のない死に
おびえていなければならないのに
野良犬は
なんべんも生まれるのだろうか

それが分ってくる時
宇宙の秘密は解けるのだ
宇宙の端が一体なになのか
その先がどうなっているのか
一匹の地に飢えた野良犬が
雨に濡れながら逃亡を続ける野良犬が
それをしっかりと
隠しているのだ

（詩集「動物哀歌」より）

「動物哀歌」の詩人 村上昭夫の肖像 ㊴

小泉とし夫

■北満の大地

昭夫は六月なかばの日曜に、日帰りで汽車の旅をしてみました。ハルビン駅から東(綏芬河)西(満洲里)南(新京)北(北安)に路線が走っていたが、昭夫が乗ったのはハルビン―北安線でした。北満の風に吹かれてみたい気がしたのです。北安まで行けば山内、古舘両君に会えるが、片道十時間もかかるので今回は見送り、綏化駅で折り返すことにしました。

午前のダイヤは空いていて窓側の座席を占め、遠ざかるアール・ヌーボー様式の白い駅舎を見送ると、松花江の長い鉄橋にさしかかった。移り行く景色を見とれながら幾つかの町や村落を過ぎ、車窓に茫漠とした平原が映し出され、野生のシャクヤクの群落がピンク色に染めていました。

四時間ほどして汽車は綏化駅に停車し、ここから北安行と桂木斯(チャムス)行に分かれます。桂木斯は三江省の省都だから下車する乗客も多く、昭夫もここで下車しました。綏化は綏桂線の乗換え駅ばかりでなく、また機関車への給水も行われていました。

昭夫はハルビンに帰る汽車の車窓から、あの衝撃をうけて眺めた大平原の風を胸いっぱいに吸い込みました。詩稿ノート『荒野とポプラ』に未発表の文語詩で「北満にて」と題した短い詩がある。この詩は、たぶんこのときのイメージが描かれたものとみられる。

くまもなく光は降り
大空をよこぎる雲も
何処より何処に果ん
自然のまこと
いつくし大地

黒土は限りもなく
幾度かここに栄え滅びし
国々
変わらぬは
よろずのさとよ
やさしき大地

ひたすらにこの地に生き
土にうもる
かすかなり大地の人 たくましき民よ
我等またそもばたたえん
陽なるは大地

失われた犬

あれは何時のことだったか
犬が犬でなくなったその日は

その時から
ひとつの言葉が失われた
馬の言葉が
牛が羊が魚が虫が
とだえた河のように見えなくなった

今では犬は町のものだから
異様にふくれた町のようにみにくい

犬の食物は月のかけら
犬の飲物は月のひかり
今では犬の食物はなんだろう
森の精神でもなく
一滴の岩清水でさえないのだ

(詩集「動物哀歌」より)

「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像 ㊵

小泉とし夫

■関東軍の幻影

山室信一氏は満洲国をギリシャ神話の怪獣「キメラ、キマイラ」に例えました。頭が獅子、胴が山羊、尾が龍（蛇）の合成怪物です。獅子は、関東軍を指すのです。

関東軍はまさに満洲国を牛耳る獅子でした。関東軍司令官が日系官吏の任用権をもつばかりでなく、法律制定にも関与し最高決定機関（国務院会議）も審議にかかる前に、関東軍の〈内面指導〉が必要でした。

関東軍司令部の庁舎は、新京駅前の大同大街を南下すると、威圧するような三階建てが目に飛び込んでくる。天守閣を備えた堂々たる〈お城〉です。まさに獅子の庁舎でした。

昭和十六年の夏、関東軍特別演習（関特演）で兵力が増強され、七十万の無敵関東軍と豪語しましたが、十七年九月以降は太平洋戦争の戦局が悪化するとともに部隊の抽出（引き抜き）、転用が行われることになりました。

十九年一月以降は南方その他の戦場へ、優秀な精鋭兵団も続々抽出され、その数も二十個師団に上りました。抽出が関東軍全部隊に波及して戦力の弱体化が進みました。

そこで兵員の頭数をそろえるために、二十年五月から七月にかけて満洲在住の日本人を根こそぎ動員し師団を急造し、どうにか穴埋めをしたが装備・訓練も未熟な張り子の部隊にすぎず、もはや無敵関東軍の偉名も幻影とかすんでいきました。

空と海を制する米軍は、三月に硫黄島を攻略し、六月二十一日には沖縄守備軍を制覇し米軍は沖縄を確保したと発表しました。

一方、ソ連（現ロシア）は、四月五日にモロトフ外相が駐ソ佐藤大使に日ソ中立条約不延長の覚書を手渡すなど、ソ満国境線にはただならぬ暗雲が垂れ込めてきたのです。

七月になると、昭夫の身辺にもただならぬ空気が押し寄せてきました。（毎週木曜日掲載）

亀

亀の甲羅を割った人と日を覚えている
固い石の上にうちつけたのだが
その時から一瞬
世界の不幸が始まった気がする

割られた亀の甲羅は
まだ若くてみずみずしかった
宇宙が改まらない限り
亀は何時でも亀のままな気がした

亀は何時でも静かな水の底でいるものだから
亀の流す涙は
亀自身にも見えない気がした

亀は宇宙の改まる日を
じっと待っているのだ

（詩集「動物哀歌」より）